

韓 信 の 失 脚

——全相續前漢書平話から西漢通俗演義まで——

橋 本 堯

一

わたくしがこれから問題にしようとしているのは標題に示したように、特定の作品のことではない。また、韓信という歴史的人物がどのような文學作品にどう演變されているかということでもない。わたくしの研究對象は前漢という歴史時代をあつかった長篇歴史小説(講史)の一派譜の發展の様相である。

中國の元、明にかけて、長大な小説が多く出現している。もちろん、こうした長大な作品は一度で完成されたものは少く、最後に完成したのは特定個人の作者であっても、それまでに多くの人々の手によつて次第に肉付けされ發展させられてきたものである。しかし、ひとたび集大成されて決定版ともいふべきものがつくられてしまうと、それ以前の過渡期に成立したものは、ほとんど歴史の飾にかけられ、年月の腐蝕作用を受けて、やがてあとかたもなく消滅してしまうのがつねであるから、發展のあとを考察するのは容易ではない。

わたくしがこれから述べようとする「西漢通俗演義」も當然この例にもれず、それ以前の先行作品はどれも絶滅に瀕していたものばかりである。

中國小説發展史の解明に何かの手がかりになることを願いつつ、いささか側坑を掘りさげてみたい。

二

「全相續前漢書平話」から「西漢通俗演義」までの間には、なお二つの過渡的作品が現存している。いまその合計四つを列挙してみよう。

①「全相續前漢書平話」これは「呂后斬韓信」という副題がつけられ、元の至治年間(一三二一—二三年)に刊行されたものである。

「全相」というとおり、毎頁上段に精巧な繪を付ける。上中下三卷に分れ、章回はない。半葉二十字、行二十字で合計三十七葉。同じころに刊行された「全相三國志平話」等とひとつのシリーズであつて長篇小説發達史上きわめて重要な資料。近年中國から影印本が出て見やすくなった。(一九五六年、文學古籍刊行社)

②「全漢志傳」嘉靖のころの福建の建甯府建陽縣の人で出版業者であつた熊大木の撰。「全漢」の名の示すごとく、西漢六卷と東漢六卷とに分れるがこれはそれぞれ獨立の作品である。本論文が對象とする西漢部分は半葉十四行、行二十二字で二百二十四葉を有する。これも

①と同じ體裁で毎頁上段繪入り。ただし繪の技術は①にくらべて甚だ雅拙である。現存の刊本は萬曆十六年（一五八八年）のもの。本邦名古屋市蓬左文庫の貴重圖書の一つで天下の孤本である。

③「兩漢開國中興傳誌」これも①、②と同じ體裁の本で毎頁上段繪入り。繪はやはり雅拙である。作者は明記せぬが②とともに福建で行された。萬曆三十三年（一六〇五年）の刊本。これも西漢四卷、東漢二卷から成り、西漢部分は一六一葉ある。半葉十一行、行二十二字。名古屋市蓬左文庫にたった一冊が現存する。

④「西漢通俗演義」八卷。これは「劍嘯關批評」とか「鍾伯敬批評」とか銘うって「東漢演義」と一つにあわせ「東西漢通俗演義」として一般に行われているものである。明の甄偉の撰で宮内廳書陵部にある萬曆四十年（一六一二年）の刊本が最古である。京都大學人文科學研究所藏の「劍嘯關批評」本は半葉十行、行二十二字で五百三十六葉。壓倒的に長くなっている。

以上のうち、①は始祖形體であるが残念なことに「續」であるので、「西漢演義」でいうと漢の高祖が天下を統一してから文帝の即位までの後半部分しかないことになる。消滅したとみられる「正」の部分はこれと著るしい近親性を有する②および③の前半の部分によって想像するしかないが、實際の面影はほぼ③と同じであろうと推定される。それは③の後半がほとんど①と同じだからである。

また、②と③はともに「京本通俗演義按鑑」というキャッチ・フレーズがかぶせられているが正規の歴史書を参考としたらしい點は②に多少見られるほか、②だけは他と異り、文帝の即位後も記述をつづけ「西漢」が終りをつげる平帝のところまでずっと延長されている。葉數が多いのはこのためであって、やはり文帝即位までで切れている

①、③、④に合わせればそこまでは百二十七葉だから、長さや密度から言えば①、②、③はほとんど大差ないのである。

④は前三つの作品にくらべ、飛びぬけてかけはなれている。大巾に改作され、描寫は増大してかなり異質な作品となっている。

三

では、文學的内容から論ずれば四者はどのような関係をもつのであろうか。

宋元明にかけての長篇小説の變化については現象面から見て三つのタイプがあるように思う。

A 發展型。これは「全相三國志平話」から「三國志通俗演義」への發展のように、主要登場人物の基本的な位置設定に大移動がなく、補強され、文學としての完成にすすんだものである。

B 改作型。これは「大唐三藏取經詩話」から「西游記」への變化がその例で、主人公が入れかわって大巾に改作された結果、面目を一新したものである。

C 別系統型。これは「五代史平話」と「殘唐五代史演義」のように主人公ばかりか、物語が根本的に異質であって改作や發展の脈絡がさだかでないものである。

①から④の「西漢通俗演義」に至る過程を見ると、右のタイプのうちの改作型と考えてよいが、改作のために本来明確であったテーマがくずれ、主人公の地位に變化を來したため、分析しにくくなっていることに注意すべきである。

また、②の「全漢志傳」は漢末まで記述しているから、真正正銘の「全漢」ではあっても、文帝の即位以後は小説文學らしい統一や劇的

構成に乏しく、本来の西漢の物語として形成されてきた部分とは關係のない蛇足であるとして、本論文の對象から外すことにする。

そこで、①で消滅したと見られる部分もあわせ、四者に共通した小説的構成部分として、秦の始皇帝の誕生のいきさつから始まって漢の文帝の即位までのことを、「西漢の物語」として四者の關係や特色を分析しつつ、物語發展の姿を眺めることにしよう。

そうすると、この四つの作品から、細部の差異はさしおいて、根幹をなす物語のあらずは、つぎのようになるだろう。結果として正史をまとめたことと同じようなことになるが、記述の都合上、念のためにかかげておく。

戦國の末年、豪商呂不韋の手によって趙から救出された秦の皇族の妃から生まれた秦の始皇帝。その暴政のために諸方から反亂が起る。沛公、楚の項羽の二雄が次第に頭角をあらわしてともに秦を攻める。鴻門での兩雄の劇的な對決ののち、秦の滅亡後、やや劣勢な沛公は張良の策によって、しばらく蜀の邊地で雌伏する。股くぐりの韓信ははじめ楚に仕えたがみとめられずに不遇をかこつが、張良の紹介でついに漢にくらがえする。ここで大臣蕭何の熱心な推舉により、ようやく元帥の地位を與えられた。韓信が元帥になってからの漢は、張良の政治工作の卓越した手腕とあいまって次第に楚を壓倒する。漢の軍には力量において楚の諸將ほど武藝にすぐれたものがないにもかかわらず、韓信は用兵の妙によって百戰百勝で勢力を擴大する。漢王沛公は調子にのって、韓信や張良のいさめを聞かず、單獨出兵して陘水で大敗北をこうむり、父、太公を捕えられたりするが、張良、陳平等の工作や部將の犠牲により、たくみに難局をのりこえ、韓信の用兵で失地を回復してゆく。英布、彭越等の

勢力ある英雄もつきつぎと味方につく。この間、韓信は燕の辯士蒯徹のすすめで齊王の位を乞い、漢王は妥協策としてやむなくこれを見とめる。蒯徹はなお天下を楚、漢とともに三分してその一を保つ計をすすめるが韓信は漢王への忠節を守って従わない。漢王はついに一時楚と和睦し、奪われていた人質を全部とりかえしたのち、九里山において項羽を總包圍する。張良の考えで、笛と楚歌による心理作戦を用い、項羽の心腹である八千の子弟軍をことごとく散らし、ついに項羽を烏江に追いつめて自殺させ、天下統一の業をなしとげる。沛公は漢の高祖となったが韓信の強大な軍力が氣になるので、かれが楚の舊將鍾離末を私情でかくまっていることを理由に逮捕して降等してしまふ。その後、北方のえびすを征定に行った陳豨の造反に關係させて韓信をはじめ彭越、英布をつぎつぎに殺してしまふ。いづれも呂太后と協力して行ったことである。高祖の死後、呂后とその一族が權勢をほしのままにするが、田子春の助けをかりて劉氏は復權をはかり、文帝が即位してめでたく漢の秩序が回復される。

.....
以上である。この内容のうち、④では呂太后が行なった行爲は韓信、彭越、英布を殺すところまでであって、それ以後、惠帝のときの戚夫人や趙王如意を虐殺した話など、まったく削り去っているのが特徴的である。

あらずじて明らかなおおり、だいたいのところだが、この小説をよまない人でも、楚漢の興亡のころの歴史事件をほぼ追いかけて頭にかべて見たのとかわりないことが了解されるであろう。しかし、もちろん小説であるから、まるきり正史とは關係なく、民間でつくりあげら

れたと見られるような荒唐無稽な部分も入りこんでいる。

そのもつとも特色あるところを次に引用してみよう。文章は②からとつてみた。高祖の妃、呂太公が自ら殺してきた韓信たちの亡霊の祟りに苦しめられる話である。

近臣奏曰、内門前陷一大坑、内湧出一肉塊、無眉無眼、上面有四句詩、道甚的

劉興呂不興、兩口不安寧、彭英威與韓、跳出陷人坑

太后聽畢、於我之禍也、喚左右伏劍砍之、不能破也、太后勅令將於郊外取穴埋之、左右將去埋訖、隨後肉塊復入城來、又作人言、罵太后、無端賤人、不消百日、你兩口吃劍也、太后不忍見、令人將肉塊墮於河中、半夜前後河水溢滿長安浮橋、百姓盡皆奔走入城、又水至城門、……太后會百司文武、安排祭河神之物、后至河邊、排列香案羊酒、供獻河神、遂祝曰、河伯河神、願息威靈、有災罪我、無害生民、吾今致祭、風靜河清、祝畢、衆官一齊下拜、忽一聲震響、太后舉頭、見河中一隻大船、船上有高祖韓信彭越英布戚氏趙王等神魂、黑雲罩定、大臣皆不見、惟有呂后見、漢祖舉手而罵、賤人你姉妹二人、信纒言、損害忠良、所謀我劉氏江山、封呂氏爲王、皆是賤婢、數句罵訖、韓信道、我王免怒、信張弓兜箭、拽滿射去、正中呂氏左乳上、呂氏倒於河邊……

……おそばの者が奏上する。「ご殿の内門の前に大きな穴があきまして、肉の塊が出てまいりました。目もなければ眉毛もございませぬ。そのおもてには四句の詩が書いてございまして『劉は立つても呂は立たぬ。ふたつの口は無事じゃない。彭さん英さん、戚、韓さん、おとし穴から飛び出すぜ』とかいう文句でした。」

太后は聞きおわるなり「ああ、わたしの禍じゃ」と言うので、北

面の武士たちに命じて劍で斬りつけさせたがさっぱり切れない。太后は救命を出し、郊外に穴を掘って埋めさせたが、近侍の者たちが埋め終ったのち、肉塊はまた城内に飛び入り、さらに人語を吐いて太后をのしつたのである。「とんでもない下種女め、百日たたぬうちにきさまたちに劍を食わしてやるぞ」

太后は見るにたえず、人をやって黄河におとし、捨てさせた。夜中に河の水があふれだし、長安の橋を水没させるほどになった。人民はみな城壁の中に逃げこんだが水は城門まで迫ってきた。太后は百官をあつめ、河の神を祭る用意をととのえ、黄河のほとりに出かけて香机を並べ、羊肉、酒を供えて河の神に獻じた。祈つて言う「河の神よ河の神よ。願わくは御靈をしずめさせたまえ。罪あらば我を罰し、民を苦しめたまわぬことを乞願いたてまつる。我、いまここに祭事を行わん。風をしずめ、河を澄ませたまえ」

祈りおわるともろもろの大臣役人たちは、一齊にひざまづいて禮拜する。たちまち物音がひびき、太后が面をあげてみると、河の中心ほどに一隻の大船が現われる。船の上には高祖、韓信、彭越、英布、戚氏、趙王等が魂をあらわしている。黒雲が立ちこめ、大臣たちは皆見えないが呂后だけには見てとれた。高祖は手をあげてののしる。「下種女めが。そこの姉妹二人が纒言を信じて忠良の人を害めおつたのじや。われらが劉室の國土をたばかり、呂氏を王に封建したはみなそこな下種女のしわざ……」ひとくさり終ると韓信が「王よ怒りめさるな」とばかり、弓にかぶら矢をつがえ、よっ引いてひょうと放てば、矢はあやまたず太后の左の胸に命中し、呂太后は河のほとりにバツタリ……(『全漢志傳』卷四漢大臣飲宴典令、原文傍點は筆者)

大分長くなつたけれども、ほとんど知られていないこの作品の文章の趣きを紹介するために引用してみた。

この部分は、ごくわずかの字句の異同をのぞいては①、②、③ともまったく共通している。しかし、②では部分的に改作が始まっているのに、ここには變化のあとが見られない。そのため、傍點をほどこした部分は改作した部分と矛盾を生じてくるのである。そしてもちろん、全面的に改作のすすんだ④においては、もはやこの民間色の強い話はまったく削除されて跡かたなくなっている。

けれども、一般には、正史のある部分が小説に創作されているものを見ると、特定の人物やそれにまつわる事件がひどく潤色され、發展して、あたらしく小説の中で主人公の地位を保っているのを見ることができる。「三國志演義」の張飛や關羽、「殘唐五代史演義」の李存孝などはみなこうして正史の中での本来の地位や記録のワクをつきやぶつて英雄像としての獨立の歩みをはじめた結果、主角の役割を確保したのである。したがって、逆に考えて、正史の記録内容から大巾にはずれている部分に注目し、その内容を構成している人物像を追究すれば、小説の中の主人公格をみつげ出すことができることになる。近代小説とちがつて多くの人間が生きかわり、死にかわりして登場することのような作品では一應この方法にしたがつて分析をすすめて見るのも良からう。

そこで、表面上頻繁に登場する、沛公(漢王)、項羽、張良、韓信、呂太后などを検討してみよう。そうすると、沛公、項羽、張良についてはまず失格である。かれらは意外に正史に記録される事件や性格のワクを出ることが少いのである。張良が黄石公から兵法をさずかるエピソードや、有名な鴻門の會における沛公、項羽の對決、項羽が四面

楚歌になる垓下の戰など、どの流れをとつてみても小説としての發展は、簡潔な史記の記録の間隙をうずめて肉付けした程度にとどまり、大膽な潤色や變化は見られない。

そうなるに残るのは韓信と呂后、それに彭越、英布の計四人ぐらになる。しかも、呂公があとの三人を殺す、という關係があり、これが物語の後半の重要部分を占める。

そこでわたくしは主人公格として最重要人物は韓信であると指摘したいと思う。なぜなら、あとの三人は物語の後半にならないと個性的な活躍をはじめないのにくらべ、韓信は前半にも後半にも息ながく登場するからである。

四

ではしばらく韓信に焦點をあてて、①④までの四つの作品で、その描き方がどのように變化しているかを見よう。

まず第一はかれが漢王に對して謀反を起したのかどうか、という點である。これについては①と③では韓信は潔白であり、②と④は謀反を起したことになっている。いま④によつてそれを示そう。はじめの梗概に出てきた、陳豨が北方のえびす征伐に出かけるときのことである。韓信はかれに逢つてつぎのごとくに言う。

君今征蕃成功之後、與我破楚之功孰爲大小。豨曰、破蕃之功一小圖耳、破楚之功乃萬世之功也。豈敢論大小哉。信曰、我以如此之功、一旦廢置不用、君若破蕃奏凱、朝爲王公、暮則匹夫、就如我今日爲樣子也、豨曰、必如魯公有何指示、信曰、君所居天下精兵之處、況君又爲陛下親信之幸臣也、人言君叛、主上決不信、若有傳報疊至、主上必怒而就往征之、我却爲君、從中起兩勢夾攻、天下可圖

也……(西漢通俗演義卷八、陳豨監趙代謀反)

「貴公が今回、えびすを平げしあかつき、それがしが楚を破りし手がらと、どちらが大きいとおぼし召されるかの」陳豨が言う「えびすの平定のごときは小功でござる。楚を破るの功は萬世の功、どうして大小を比較できましよう」韓信「それがし、これほどの手がらをたてながら、すてて用いられぬでござる。貴公とてえびすを平げて凱戦めされても、朝には王公、夕には匹夫、それがしが今日のありさまと同じことでござるよ。」陳豨「必定貴殿の仰せの通りとあらば、何かお教えのすじは？」韓信「貴公は天下の精兵を保つていなさる。いわんやまた陛下の信任あつき幸臣。よそ人が貴公の謀反を告げたとて陛下はご信じなされぬじや。もしかさねて注進が參れば陛下はかならずご立腹し、みづから戦にお出になる……そこへそれがしが貴公のために國內でことをおこし、兩方して攻めたなら、天下を取るもまた可というもの……」

これがいわゆる韓信の謀反の内容であるが、①と③ではこのとき、陳豨が韓信の現在の不遇に同情するのとどまり、むしろ謀反を言い出すのは陳豨であり、韓信はただそれをだまっただけ、ということになつてゐる。

そこで、この韓信の謀反の有無によつて、①③と②④とでは、その後の内容にも若干の變化を生じてくるが、それは韓信の罪をさばく漢王の描き方に影響が出るのである。

もともと韓信に對してしきりに謀反をすすめたのは燕の辯士蒯徹であるが、韓信が聞き入れなかつたので、漢王からの追究を恐れて逃れ、ニセきちがいを装つて街を放浪する。しかし、韓信が刑死したあ

と、ついに逮捕され、漢王の面前にひき出される。そのとき、①と③では蒯徹は辯舌をふるつて韓信を辯護し、その無實であることを漢に對して犯した「十罪」「五反」という形で逆説的に證明することによつてみごとに立場をひっくりかえすのである。その結果、漢王はすっかり心を動かされ、韓信を處刑してしまつたことを後悔する。

帝見通數信十大功勞、無言可答、兩眸垂淚、群臣亦傷感(文中「通」とあるのは蒯徹のこと)③卷4「蒯通見帝訴信功勳」

……みかどは蒯通が韓信の十の大功績を敷えたるのをお聞きになつては返すことばもありません。兩眼に涙をうかべられますと、並いる臣下たちも、ぐつと胸をつまらせたのであります。……

ということになつて、蒯通はもちろん死罪を免かれたばかりでなく、すっかり面目をほどこし、ほうびをたんまりといただいて下り、韓信の菩提を弔うために故郷へ歸る。

こうした経過をふまえたうえで、さきに引用したような、呂太后が韓信の亡靈になやまされる話にながつてゆく。

しかし、②と④では、この場面はすこし趣を異にしてくる。もともと韓信は明白な謀反を行つてしまつたのだから、蒯徹の辯舌も、かれの無實を主張するという方向から論を立てることはできない。結果としてはここでもかれは死罪にはされず、やはり韓信の菩提を弔うために歸るが、かれが許されたのは韓信に對する忠義一徹なところに漢王が感心したためである。

陌之犬吠堯、堯非不仁、犬故吠非其主。當是之時、臣惟知有韓信而不知有陛下也、若信果聽臣言、豈有今日、信今既死、臣亦不欲獨生、陛下如欲烹臣、臣即就死、亦不敢避、帝咲謂左右曰、徹之言、

亦信之忠臣也、彼各爲其主耳、朕今釋汝之罪、授汝以官、汝以爲何如……②卷三「蒯通片語折高皇」(傍點は筆者)

(蒯徹がいう)「盜跖の犬が堯帝に吠えつきますもの、堯が不仁だからではなく、自分の主人でないからでございませぬ。あのとき、臣はただ韓信あるを知って陛下の存在を知りませんでした。もし韓信が臣のことを聞き入れていたなら、どうして今日のようなことになりましょうか。韓信が死んでしまった以上、臣もひとり生きたくはございませぬ。陛下が臣を煮殺そうとなさるのでしたら、臣はあえて逃げず、すぐ死に赴きます。」帝はわらって、おそばのものに言う「蒯徹の言うことを聞けば、やつもまた韓信の忠臣じや。ひとは各々その主のためにつくすものじや。朕はいまそちの罪を許し、官位を授けてつかわそうと思いがどうじやの」

この調子は④でもまったく同様である。わたくしの傍點をほどこした部分に注意されたい。韓信の謀反が客觀的事實である以上、漢王はあくまで權力者として「わらって」「罪を許す」立場をまもることが出来る。そうして、漢王がまったくの仁君であることが、いやがうえにも發揮されるのである。したがって、①、③において後悔の涙を流した人間漢王の姿は、ここではすっかり消え失せてしまっている。この點に漢王の性格の重大な變化を見るべきであろう。韓信が謀反したという改作の行きつくところ、漢王の描き方に影響が及んだのである。

第二に、韓信の出自を見よう。これについても重要な點で四つの作品には相違がある。もっとも①は「正」篇を缺くので、資料としては②、③、④になる。

韓信が貧しい出であることは史記の記述と三者とも一致していて、

とくにかわつたことはない。ところが、②と③では次の話をつけ加えている。

韓信が城西で釣をしていたころ、松の木の下の下でうたたねをした時、武曲星が乗りうつた夢をみた。おどろいて占師に尋ねたところ、他日かならず元帥の位にのぼるであろう、と豫言される。

この話、④ではまったく削り去って、載せていない。④ではいったいに正史に載らない怪異のことは、原則として削除しているのが特色だが、これをけずり去ってしまったことは、韓信の性格そのものを改變してしまうのの一つの効果を與えたことに注意する必要がある。というのは「三國志通俗演義」の關羽や「殘唐五代史演義」の李存孝など、これら通俗小説の英雄たちは往々にして神格化されたり、上天の神々との關係をもっていたりするからである。したがってここで、この武曲星の話は、韓信が小説の中の英雄と化してゆく過程で付加されたものにちがいない。そうであれば④がこれをとり去つたことは、韓信に「謀反」の罪を着せたこととあいまって、かれから英雄としての衣裳を剥奪する効果をもつのである。韓信は他の點でも、風の吹きぐあいによって敵の攻撃を察知したり、泉を發見したりする、という神秘的な能力をもつことが、②および③には書かれているが④ではこれもことごとく削っている。同斷とみるべきであろう。

第三に、韓信が漢王によって元帥の地位を獲得するまでの経過を考えてみよう。

韓信が蕭何の熱心な推舉によって、ようやく元帥になるまでのあいだ、項羽に仕えて不遇をかこつていたという點では②、③、④ともに共通している。しかし、その不遇ぶりはとくに②、③において著しく強調されて描かれている。

すなわち、韓信は項羽の旗下にあって賤役しか與えられなかったばかりでなく、秦の部將章邯との戦いにおいて、夜襲の危険を進言したために、かえって項羽の怒りを買ひ、斬られそうになる。鴻門の會のときにも、沛公の軍を一擧に撃とうとする項羽をいさめて機嫌を害ね、またもや殺されそうになる。このように、意見を述べるたびに刑死の危険にありである。しかも、項羽を見かぎって張良のすすめに従って漢に投じてからも、韓信は不運つづきであった。はじめは典獄官に任ぜられるが、囚人が秦の罪人ばかりなのを見て、これをことごとく釋放してしまい、その罪によって斬首の刑を受けそうになる。つぎに治粟都尉に任ぜられるが、ここでも韓信は倉を勝手に開いて、古米を人民に施してしまい、漢王の怒りを買うのである。そうしたかさねがさねの失敗にもめげず、大臣蕭何がしつこく韓信を推舉するので、とうとう漢王は大いに怒り、机をたたいて退席してしまふ一幕もある。あきらめた韓信はひそかに國外へ退去しようとし、あわてた蕭何が馬にのって追いかけて呼びもどし、ついに漢王を説きふせて元帥に任ずる。この場面は民間でもかなり人氣があつた話であろう。金仁傑の撰で元曲として残つてもいる。「蕭何月夜追韓信」がそれである。

これはひきかえ、④ではかなり趣を異にしている。韓信は不遇ではあつたが、ただそれは進言が受け入れられなかつただけであり、命までも失ひそうになる目には逢つていない。そして韓信は、漢に鞍がえする際、張良の推薦を證明する割符を持參して行く。漢に入つてからは、やはり始めは賤職しか與えられないけれども、韓信はすこしも不平の色をみせず、まことに忠實、かつ完璧に任務を果たすのである。そのあと、やはり同じように夜、逃げ出し、蕭何が追いかけるのだ

が、これは實は韓信が自らその効果を計算した術であることになつてゐる。そして、かれが認められないのを心配する蕭何の前に、張良からもらつた割符を示してすつかりおどろかせ、ついにそれを漢王に見せた結果、元帥に任命される。

ここで、つぎのことが言えるであろう。

②、③の作品における韓信は、いわばすることなすこと、ことごとくに權力者の氣に入らない。しかも漢に來てからの韓信は、手柄をたててそれをみとめられない、というのではなくて、わざわざ支配者の顔を逆なでするような行爲をしているのである。韓信としては當然の行爲と思つて行ふことが支配者の怒りをまねく。したがつてここに描かれた韓信の人物像は、決して單に君主に忠實な股肱ではなく、それとは一定の相對的獨自性をもつた英雄としてのイメージを十分に發揮しているといふべきである。これにひきかえ、④における韓信はそうでない。かれは結局は自己の獨立的な能力よりも、むしろ君主に忠實であることによつて元帥の位をかちとつたのである。賤役ながらかれが漢王に仕えたはじめにあって、その仕事ぶりはまったく封建官僚としての能吏のワクを出ない。かれの出世はすでに張良からもらつた割符によつて保障されているのであつて、かれはただそれを最も効果的に使用することによつて自己の面目を保とうとしたにすぎないのである。こうなると先ほど述べたような意味での英雄のイメージはよほどうすめられているといつてもよいだろう。

韓信が英雄らしさを④で失つてゐる點はまだほかにもある。卷六に、漢王が夜あけがた、趙にゐる韓信の陣をたずねると、韓信も副將の張耳も、昨夜の白酒のため、正體なく酔ひ伏している。そこで漢王は元帥の印を奪いとつり、外に出ようとするが、そのとき韓信はやつと

目をさます。

韓信方起身、忽見是漢王、不勝驚惶下床俯伏曰、臣該萬死、不知大王入營、有失遠迎、王歎曰、輕騎數人遠營、馳走直入中軍、將軍尙睡未起、印已取過、左右亦無人報告、倘刺客詐稱漢使、因而入營取將軍之首、如探囊取物耳、將軍坐鎮一國、敵人新降、疎漏如此、豈足以爭衡天下乎、說的韓信羞慙滿面、站立不住、須臾張耳方到、叩頭伏罪。(卷六、漢王馳趙壁奪印)

……韓信はやつとおきあがり、ひよいと漢王を見たので、あわてふためいて寢臺からおり、平伏した。「おそれ多いことでごさいます。大王のお出ましを知らず、とんだ不敬を致しました。」漢王はため息をついて言う。「輕騎數人をしたがえて基地の周邊をめぐり、すぐさま司令部に入ったのに將軍はまだ睡ったままじや。元帥印をとりあげても、それを知らせる者として詰めておらん。刺客が漢の使者といつわつて陣地に入り、將軍の首をとろうと思えばいとも簡單なことじや。將軍は一國の防備に責任をもつ身でありながら、敵勢やつと降ったばかりのとき、かほども手ぬかりとあつてはどうして天下を争うことなどできようか」

いわれて韓信まっ赤に恥じ入り、立つていることもならず、しばらくして張耳が来て叩頭して罪を乞うた。……

まったく形無しの姿である。あの「用兵如神」(②、③に散見す)といわれ、百戦百勝した韓信の面目はいったどこに行つてしまつたのであろうか。この話は②、③にはまったく載せず、ひとり④のみにつけ加わっているものである。もとづくところは史記であつて、漢王が勢力を得てきた韓信をコントロールするために、漢使といつわつて

元帥印を奪つてしまうのであるが(史記九二、淮陰侯列傳)、ここでは、そのような陰險な漢王の性格はあいまいにぼかし、韓信のだらしなさをたまたま叱りつけることを口實としていることに注意する必要がある。ここまで韓信を英雄らしからぬ姿におとしめてしまったのは明らかに意圖的な改作といわねばなるまい。

以上、韓信の描き方について小結論をほどこせば、韓信はその出生の異常さから、不遇の時代、君主に迎合せぬ性格、百勝將軍としての強さ、殺されて魂をあらわす悲劇的な結末に至るまで、一般の長篇小説に登場する典型的な英雄像とかなり共通した性格と役割をもつていたが、それが次第に改作されるなかで英雄の地位からひきずりおろされて行つた、ということになるだろう。④ではまだ①の作品の當初のままであつたものが②では謀反の事實を基點として改作がはじまり、④はすっかり漢王の一臣下にすぎぬところまで格下げがすすんだ結果となつている。

なぜこのような改作が行われるようになったのか。それを考えるまえに、わたくしは①、③に描かれた韓信がまちがいなく古型であることを念のために他の資料によつて確認しておくとともに、それを通じて表現されている一貫したテーマをつかみ出しておく必要を感じる。

五

まず、①と同じところに刊行された同一シリーズの俗語小説「全相三國志平話」の冒頭にかかげられた因縁ばなしがある。これは現行の「三國志通俗演義」には見られないものであるが、韓信、彭越、英布の三人が地獄の法廷で漢の高祖と呂后を相手どつて訴訟をおこす内容である。これをさばいた司馬仲相は無實の主張をみとめ、仇うちの意

味で三人を漢末にそれぞれ曹操、劉備、孫權に生まれかわらせ、漢の天下を三分させるという判決を下している。また、宋元の話本の趣をかなりよく傳えているとされる「清平山堂話本」の中に「張子房慕道記」というのがある。ここでは張良が、韓信、彭越、英布の三人の悲惨な運命を教訓として、わが身の破滅を招かぬうち、功成りて身退き、引退して道術をおさめようとする心事をのべて漢王をあわてさせる話がかかれていた。

元曲にも、「錄鬼簿」等の關係資料をあたってみると、現存こそしていないが韓信に關係した戯曲は十種ほどあり、その中でも鄭廷玉の「漢高祖哭韓信」は題名からみても關漢卿の「鄧夫人苦痛哭存孝」の例から判断しても、韓信の謀反を無實としていたであろうことはほほまぢがいない。

また、「全漢志傳」等の作品の知名度が、「三國志」關係にくらべてやや低いせいも、いわゆる「東京夢華錄」等の小説關係史料に作品名で記載されていることはないが、それでも「京本通俗小説」の中には、第十五卷「錯斬崔寧」の一節として、

「五代史李存孝、漢書中彭越」と、作品名としてあがっていたり、さきの地獄の裁判物語が「古今小説」の第三一卷にずっと擴大されて載っているなど、この韓信の悲劇の物語が多くの讀者を有していたらしい形跡はいろいろみつかるといふ。

以上によれば韓信は、

- 1、もと無實の罪で殺されたという形で廣く行われていた。
- 2、漢の物語の中では最も重要な主人公であった。
- 3、三國志演義關係の英雄と同列に置かれるような不世出の人物像としてあつかわれていた。

ということが言えるだろう。

このような假定の上に立って、韓信を中心に①、②、③の作品の構想を分析してみるとまことにあざやかな共通テーマが流れているのを見ることができる。

いったい、韓信は物語の後半、つまり漢の天下統一後になると、どうしたのか、あれほど用兵の妙と智謀にたけた人物であるにもかかわらず、いとも簡単に、まるで自ら吸い寄せられるようにして刑死への道をあゆむ。

それは第一に、かれを陥入れようとたくらむ漢王や呂後の意圖を見ぬくことができず、單純に漢室を信じこみ、忠誠の態度を保ちつづけていたからであり、第二に臣下のいさめを聞き入れなかったからである。

韓信見孫安威陽而來、問曰、何事、孫安曰、天子巡遊、韓信離坐、仰告天曰、四海晏然、萬民樂業、此乃帝乃恩德、親臨撫恤、真難得也、孫安奏曰、大王錯矣、非撫萬民、專來擒大王、信見此言、驚而問曰、爲何、孫安曰、近有季布、帝赦其罪、爲大王私藏鍾離末、無計取之、詐稱巡遊來就大王、大王可熟思之、韓信道、無此事、我不曾負漢、漢不負我……（①上卷）

……韓信は孫安が都から歸つたのを見て、問う「何事だったかね。」孫安「天子の巡幸がございます。」韓信は席をはなれて天をおおいで言う「天下泰平、國家安康は帝の恩德のためだ。親しく見舞われるとはありがたいことだ……」孫安「それはおまぢがいです。萬民を見舞われるではありません。大王をとりこにしようというのです。」韓信はこのことばに驚いて問う「何のためだ。」孫安「ちかごろ季布があらわれ、帝がその罪を許されました。ところが大王

がひそかに鍾離末どのをかくまっていた、つかまえる方法がないので、視察といつわって大王を捕えようとしているのです。王よこれをよくよくお考え下さい。」韓信「そんなことはない。わしはいまだかつて漢に背を向けたことがないし、漢だってわしを裏切りやしない……」

韓信ばかりではない、彭越や英布なども、前半の部分で楚を打ちやぶったときの英雄らしくもなく、後半になると次々に呂后の手にかかって、いとも他愛なく殺されてしまうのである。彭越もやはり、漢王から召集がかかったとき、その意圖をうたぐって忠臣扈衛が心をつくしていさめたのを聞き入れず、カラスが不吉を知らせる聲にも気がつかない。英布もせっかく韓信と彭越のために甲合戦をこころみたのは良いが、酒を吞まされていとも簡単にだまし殺される。

そのほか、呂太后が高祖の寵姫戚夫人を惨殺し、ついでその子の趙王如意を呼び寄せて毒殺する、史記と同じすじ描きの部分だが、①、②、③ともにつづくのだが、ここでも、とくに①、③においては趙王が召しに應じて都へ入ろうとするのを忠臣崔遂が必死でいさめるが、趙王はそれをムチでなぐってしりぞけてまで出かけてとうとう呂后の毒牙にかかったことを書き、臣下のいさめを聞かなかつた例にあわせて統一をとっている。

この戚夫人と如意の物語はまた、権力者の下に置かれた弱者の哀れな姿を描いているともとれるが、英雄韓信の後半の生き方を眺めてみると、かれも如意と同様、権力者の下での弱者の地位に轉落してしまつたかのように見える。單純に漢室を信じこんでしまつたかれはもはや初めて漢王に仕えた時のような奔放不羈な英雄の姿を失っている。それにひきかえ、後半で韓信と對照的な姿を見せるのは陳豨であ

る。かれは天下統一後の韓信が受けた不當な處遇から教訓を學びとり、漢王にまっこうから謀反を試み、邊境でさんざんに暴れる。その結果、①、③において、かれは漢軍をしたたか敗走させた結果、韓信の悲報に接して、天下を奪いとることこそ斷念したものの、域外へ逃げのびて、自己の生命を全うすることができるのである。しかし、②、④では、この結末はすっかり書きかえられ、かれは部下に離反されてみじめな敗北を蒙るばかりでなく、鴻門の會いらいおなじみの樊噲に首をうちとられてしまうのである。

こうした書きかえによるゆがみを除去して、前半と後半を統一的に考えてみると、①、③ともに、じつは共通したテーマが流れているのではないかと思われる。それは、反亂をおこし、または自らが戦う立場に立つて支配者に油斷なく對處するものが生き残つて發展し、そうでなくて戦う立場に立たず、自分よりもより強大なものに對して反抗することを忘れた人間が失敗するのだ、という内容である。

韓信が呂后の手にかかって未央宮で斬られるに當つて

「我不聽蒯通之言、鍾離末之語、悞我落在賤人之手」(①上卷)

「わしは蒯徹のことばや鍾離末のいうことをきかなかつたばかりに、身をあやまり、下種女の手に落ちたことだわい」

という後悔は、この意味での總決算といえるだろう。そして韓信という典型を通じて、このテーマがもっとも強烈に表現されているのである。韓信の漢王に對する忠誠心も、より強大な勢力である項羽との戦いの中にあつたときは、かれが自己の能力を發揮し、ところを得て自己の勢力を擴大するのにさして妨げになるものではなかつた。しかし、項羽が滅び、最強の勢力が今や漢王に轉換したときかれが戦いやめ、なおかつ蒯徹による獨立のすすめを退け、舊態依然として漢へ

の忠誠心を維持しつづけたところにかれの道を破滅の方向にむけた原因がある。かれを殺した漢王のほうは、忠臣のいさめをよく聞いて、項羽と戦う姿勢をくずさず、妥協しつづけることをしなかつたために最後まで成功したのである。この意味で漢王は韓信が中途で挫折した生き方をみごとに保ちつづけたと言うべきで、さきほどのテーマを裏から表現していることになるだろう。

こうして「強者に對してつねに戦う」という基本テーマに立つて改めて①、②、③を眺めて見ると、②において一部の修正を除くならば、かなり一貫性をもってそれぞれの人物や事件が排列されているのである。すなわち、彭越、英布、趙王らの悲劇はこのテーマから見ると否定的パリエーションとみられるし、張良が功成り名遂げて、身の安全を考えて歸郷してしまったのは消極的パリエーションとして解釋できる。だから、最後に①、②、③ともその次に田子春と劉澤との反呂鬪争の武裝決起と、その結果の劉氏の輝しい復権の話をつけ、そして①、③とがそこで物語をしめくくって終りにしているのは決して偶然や氣まぐれではなく、作者の表現しようとした基本テーマとの關連があるともみるべきであろう。

そうなると、韓信を單に叛臣とみなしたり、叛臣には當然の報いが来るのだとして陳豨が死ぬように書き變えたりした②や④のような傾向は、あきらかにこの基本テーマとは關係のない、べつな意圖による作用だと見なければならぬ。そのべつな意圖とはなにか。それは明らかに封建君主を美化し、正當化する一種の思想およびそれを支える世界觀をひろめようとするのである。

われわれはすでに韓信の寢込みを襲っておいてかれに説教をたれたり、刎徹の罪を許して物わかり良い賢君ぶりをみせた④における漢王

の描き方をつうじて、そのおいを嗅ぐことができるように思う。更に氣をつけて拾いあげるなら、④にはいたるところに、それまでなかつた漢王の美化が見えるのである。その方法はつぎの三つである。

1、仁徳をもつた理想的賢君であるかのような印象を強調する。
「秋毫も犯さず、民皆堯舜の徳をたたえ」といった表現をわざわざ頻發させる。

2、漢王に對立する人物をなるべく悪く描く。韓信や彭越ばかりでなく、楚の項羽についても、②、③にくらべて更に暴君であるように表現して、つとめて讀者の憎しみを驅りたてる。

3、漢王こそが天の佑けと支持を有する「眞命之主」であることを強調し、そのことを證明する天變については削りおとさずにわざわざ付け加え、また他の登場人物の口を借りてしきりとそれを述べさせたりして、この眞命の主に逆らうものは天罰を受けるのだ、という權威づけを行う。

こうしてみると、①と③にみられた、強者との戦いの姿勢をもつ、というテーマの正當性は、④においては天の命ずる權威に服従せよというテーマの正當性に犯されてしまっていて、②はその方向へ傾きかけた過渡期の姿を示している、といえるであろう。基本テーマが完全に維持されている點と、具體的な話の内容や文章そのものが、付加された韻文の量が多いことをのぞいて、①とほとんどかわっていないことからみて、③は古型であり、その前半の部分についても①が刊行された當初の失われたる「正」篇とまず變化していかないであろうと推定される。だから、現存諸本の刊行年順には①、②、③、④だけれども、じつさいの成立は①、③、②、④の順にちがいない。

六

では最後に、以上のような改作がなせられたのか、という問題に入ろう。

わたくしはこの問題についてまだ十分な資料を得ていないので、ごく初歩的に気がついた點を述べてみたいと思う。

第一に指摘せねばならぬのは學者知識人の手になる歴史評論の分野にも、これと同じく平行した現象が見られるのではないかということである。それは朱子の「通鑑綱目」とその評價である。

「通鑑綱目」は、あたかも「春秋」と「左氏傳」のように歴史事件のポイントを述べたものである。現行の「通鑑綱目」はこれになお後世の學者が種々の評釋をつけ加えた形で行われているが、それらをつうじ、とくに南宋末から元初にかけての學者劉友益の付した「書法」や同じく尹起莘の付した「發明」という評釋は、韓信に甚だ同情的で、反面漢の高祖にかなり批判的な見解を述べている點でわたくしの注目をひいた。

崇禎三年刊の「資治通鑑綱目」から引用してみよう。小説でいうと、「西漢通俗演義」で漢の高祖が韓信の寝こみを襲って元帥印を奪った部分に相當する。

王還至定降、馳入齊王信壁、奪其軍（卷三、漢太祖高皇帝五年）この文について劉友益の「書法」は、

前に韓信の軍を奪ふと書し、是に於て復た壁に馳入して其の軍を奪ふと書す、帝則ち未だ任術なるを免れず、此信の臣節を終せざる所以なり。

と述べて韓信をかばっている。また、漢の高祖が韓信を逮捕した六年冬十二月の條には劉友益は同じく「書法」を付して、
執へて以て歸ると書すは罪なきを執うるなり。

と述べ、また尹起莘も「發明」で、

「韓信の國人その反を告げ、『綱目』反を以て書せざるは是れ信未だ嘗て反謀有らざれば也。」

というぐあいに一貫して韓信の無實を主張している。劉友益等はちやうど「全相續前漢書平話」の内容が成立したところに活躍中であつたことを考えあわせるとおもしろい一致である。

それにこの崇禎三年刊の「通鑑綱目」には明末の文部官僚のボスである陳仁錫（字は明卿）の批評なるものが頭注の形で印刷されているが、これはまた一轉してさきの「書法」や「發明」の見解に批判的になつているのが對照的である。陳仁錫はさきに引用した「漢太祖高皇帝五年」の部分についての「書法」

「帝則ち未だ任術なるを免れず……」

という意見を「腐語」とけなし、逆に漢の高祖の處置を「此着最高」とほめたたえる。そして韓信の刑死についても、それがきびしすぎる點だけを批判するが、刑死そのものは當然であるという態度をとつてゐる。これはあきらかに明末の士大夫たちの韓信に對する見方の一傾向を反映しているし、それが元のころとがらりと變化しているのは偶然の一致とは思えない。

第二に、明代によく行われた、いわゆる妖書妖言に對する取締りの記録をみると、無籍者の農民たちがひそかに韓信に對する信仰を寄せていたことが知れる。明代の刑事事件の詳細な記録を豊富に收める「皇明條法事類纂」には成化十年（一四七四年）に錦衣衛が山東で陳

益を頭とする無籍農民グループを摘發したことが書かれているが、これらはひそかに「韓信安營印」という木刻印をつくって護符としていたという。支配者は韓信という英雄像がたいへん危険な形で利用されていることに強い警戒心をもったであろう。

第三には、以上を頭に置いた上で、明の太祖朱元璋が、李善長の進言の影響で、自らを漢の高祖に見たてていたことを改めて検討する必要がある。わたくしはまだ韓信の評價と明代の文字の獄との關係を審かにし得ないが、韓信を殺した漢の呂后や、それを委託した高祖を「高祖無道、怨氣衝天」などと非難しているような小説の存在が、やがてそのまま朱元璋とその妃馬皇后への不敬罪になることは十分に想像できるではないか。

第四に④の作者について一言ふれなければならぬ。④の作者である甄偉という人物の傳は、わたくしはとうとう明らかにすることができなかつたけれども、「渭南縣志」⁽⁸⁾によれば、順天府（今の河北省）の出身で、舉人であり、嘉靖二十七年（一五四八年）から二年間渭南縣の知縣を勤めたとある。もし、作者がこの甄偉であるなら知縣クラスの官僚の手なぐさみとしてはその出身階級や立場上、封建的體制を美化する筆致になったのも當然とうなづけるのである。そして以上の一〇三にみてきたような明の政治、思想界の動向を考えるなら改作は必ず至であろう。

以上、わたくしが本論文でおおざっぱに論じて来たことによれば、元から明へかけて長篇小説は發展してきたとはいふものの、その發展の内容にはいろいろ考えなおさなくてはならない現象もあるのではないかと、ということである。この物語の改作の方向が、韓信をおとしめてその英雄としての資格を剝奪し、その反面、漢の高祖をきわめて辯

護し、美化し、あわせて呂太后の暴虐な話を全面的にけずり落してしまつたことによつて④はその小説としてのテーマの統一性も失い、文學的なおもしろさも大分摘みとられてしまつたといつていい。いうなれば「西漢通俗演義」は悲劇の英雄、韓信を中心にした物語が十分に成熟しきらない段階で、君主中心主義の思想によつてその若枝は折りとられ、改作を餘儀なくされて残つた變型の産物である。つまり、韓信は歴史上で失脚したばかりでなく、小説史の上でも失脚させられてしまつたことになるであろうか。

明代に入つてからのこのような小説文學にみられる問題點を、退行現象の存在としてわれわれは今後もつと注目する必要があるだろう。

なお、江戸の元祿ごろ（一六八八〜一七〇四年）夢梅軒章峯なる人物の手によつて書かれ、本邦人に親しまれた「漢楚軍談」は④から冒頭の六回分をカットし、章をやや組みかえたうえ、當時としてはほぼ忠實に最後まで翻譯したものであることが、この文を草する機会に判明したので、そのむね、最後に一言書き添えておく。

註(1) 「殘唐五代史演義」については拙論「殘唐五代史演義論」（京都大學中國文學報第二十册所收）を参照されたい。

(2) 英布は「史記」では「黥布」の名のほうを列傳に表記するが小説はすべて姓を用いて「英布」で統一している。

(3) 劉友益は「全相續前漢書平話」が刊行された至治年間から約十年後の至順三年（一三三二年）まで存命している。（姜亮夫「歷代名人年里碑傳總表」）。

(4) このほか、嘉慶九年刊姑蘇聚文堂刊本も「陳明郷先生批評」として、かれの批評を付している。わたくしが利用したのはともに京大人文科研の所藏本である。

- (5) 「皇明條法事類纂」卷32、刑部類。東大付屬圖書館蔵本を古典研究會が昭和41年に影印刊行した。その上巻七七四ページ。
- (6) 明史二二七「李善長列傳」。
- (7) ①、③には未央宮で韓信が斬られた場面にこういうことはをのせている。
- (8) わたくしが見ることができたのは京大人文科研所蔵の「重輯渭南縣志」で、清の何耿繩の修した道光九年（一八二九年）刊行のもの。その巻首にある「縣官表」に記載されていた。